

第3室

(5) 9:30 ~ 10:00 (6) 10:10 ~ 10:40
(7) 10:50 ~ 11:20 (8) 11:30 ~ 12:00

第3室 (5)

SNS X

高校3年生の英語や外国に関わる経験と英語学習に対する意識

— テキストマイニングを用いて

高木 亜希子 (青山学院大学)・津久井 貴之 (群馬大学)

加藤 由美子 (ベネッセ教育総合研究所)・森下 みゆき (ベネッセ教育総合研究所)

福本 優美子 (ベネッセ教育総合研究所)

本研究の目的は、高校3年生の英語学習に関する調査において、英語や外国に関して最も印象に残っている経験がどのようなものであるか、明らかにすることである。本調査は、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの一環として行った調査項目の一部である。調査方法は郵送による自記式質問紙調査で、2021年3～4月に実施した。回答者は991名で、本研究で分析する自由記述項目の回答者は848名であった。そのうち有効回答は、826件（男356件、女469件、不明1件）であった。経験時期は、小学校に入学する前、小学生のとき、中学生のとき、高校生のときの4択で尋ねた。

分析は3段階で実施した。第1段階では、記述内容を読み、場所（学校内286件、学校外474件、不明66件）と感情特性（肯定的337件、中立372件、否定的117件）を分類し、「特になし」など分析対象から除外する回答（21件）を特定した。また、経験の違いを調べるために、選択式設問の中から、学校の英語の授業について、好き、得意または苦手を尋ねる項目及び英語（学習）の意欲・動機づけ・言語観に関する項目を抽出した。第2段階では、Text Mining Studio を用いてテキストマイニングを実施し、基本情報、単語頻度解析、特徴語抽出、経験時期と感情特性の対応バブル分析を行った。特徴語抽出については、好き・得意グループと嫌い・苦手グループの比較及び意欲・動機づけ・言語観に関する項目におけるグループ間の比較も行った。第3段階では、特徴語分析の上位語及び対応バブル分析における重要語に着目して、原文参照機能でどのような文脈で用いられているかを質的に分析した。

分析の結果、グループ間で特徴の違いが現れ、学校での授業経験と教師及び海外での交流体験が、英語（学習）に対する意識に影響を与えることが示唆された。

第3室 (6)

「日本語」による多文化交流と「英語」学習のモチベーション

山田 貴将 (南山大学)

多文化交流ラウンジ Stella は、南山大学における多文化交流の拠点として、2017年にオープ

ンした。Stella では、キャンパスの多文化化をさらに促進していくために、学生主体による多文化交流イベントを定期的で開催し、南山大学で学ぶ全ての学生が、国籍や言語、文化等の違いを乗り越え、自由に交流できる空間の提供を目指して活動している。Stella での諸活動は Nanzan International Ambassador (略称 NIA) と呼ばれる学生 TA によって運営されている。多文化交流のためのスペースであるが、外国語能力に関わらず全ての学生にアクセス可能な場所であり続けるため、Stella での活動における主な使用言語は日本語となっている点が特徴的である。

筆者は、NIA の指導・育成を担う教員として、学生がどのような思いでイベントにかかわり、何を学び、どのように成長することができたのだろうかという点を把握する必要性を感じ、2021年8月に11名の NIA 全員を対象に、コミュニケーションや問題解決力、グループワーク等に関するアンケートを実施した(回答率90.1%)。アンケートは、28項目の選択式問題(1.「強くそう思う」、2.「そう思う」、3.「どちらでもない」、4.「そう思わない」、5.「全くそう思わない」から1つ選択)と1項目の自由記述式問題から構成された。

本自由研究発表では、Stella と NIA に関して詳細に説明し、上記28項目アンケート結果を共有する。その上で、100%の調査協力者が同意した(「強くそう思う」90%、「そう思う」10%)、アンケート項目である「もっと英語を勉強しようと思った」を取り上げ、学生による自由記述と面談の結果を分析することによって、「日本語」による多文化交流を通じて、「英語」学習のモチベーションにどのような影響を与えるのかについて探索的に考察する。

第3室(7)

SNS X

在日ネパール人留学生が異文化接触時に経験する対人行動上の困難

山下 道世(鈴鹿医療科学大学)

在日留学生数は2012年には約16万人であったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受ける前の2019年にはおよそ31万人と2倍近くにまで増加した(日本学生支援機構, 2021)。特にネパールからの留学生数は急増しているにもかかわらず、彼らの異文化適応に関する研究は僅少である。

山下(2022)は、在日ネパール人留学生が経験する異文化接触時の困難を分析した結果【社会生活上の困難】と【対人行動上の困難】を認め、前者の【社会生活上の困難】について報告した。本研究では、在日ネパール人留学生が経験する異文化接触時の困難のうち【対人行動上の困難】について報告する。中野(2017)を参考に、2021年に西日本の高等教育機関に通うネパール人留学生6名に対して、一人あたり1時間から1時間半程度の半構造化面接を行った。面接の録音をもとに逐語録を作成し、異文化接触時の困難や戸惑いに関連する語りを抜き出した。KJ法A型(川喜田, 2017)を用いて分析を行ったところ【対人行動上の困難】は『他人とのコミュニケーションに関する困難』と『知人とのコミュニケーションに関する困難』の2つで構成させられることが示された。ネパール文化のうち人間関係に関わる部分の把握に僅かながら貢献すると考える。

教員養成課程の大学生の異文化理解に関する自己診断による調査研究

稲葉 みどり (愛知教育大学)

本研究では、教員養成課程の大学生の異文化理解についてどのような意識を持っているかを明らかにする。日本社会では多文化化、多言語化が進み、教育の現場も多国籍になり、異文化接触は日常であると思われる。異文化理解教育については、小学校外国語活動・外国語編(文部科学省, 2017)等の中で学習目標等に位置づけられ、また、小学校教員養成外国語(英語)コア・カリキュラム(文部科学省, 2017)でも、教員養成や研修の項目に設定されている。そこで、ここでは教職をめざす学部生の異文化理解に関する意識や態度等を把握し、初等英語教育の授業づくりや教育実践等に活かすことを目的とする。

Gyram (1997) は、異文化コミュニケーション能力の構成要素(異文化への態度・社会文化的知識・解釈と関連づけのスキル、発見とやり取りのスキル、批判的文化思考)とそれを統合した異文化間コミュニケーション・モデル(ICC)を提示している。松本(2013)は、異文化間理解能力の指標として、知識面(言語と文化)、態度面、思考スキル面の3つを提示している。また、沼田(2010)は、日本人大学生を対象として異文化理解に関わる諸要因の基礎研究を行っている。本研究ではこれらの先行研究から知見を得て、大学生に対して、異文化理解のスキル、異文化への態度、異文化理解の意識等に関して自己診断する設問を作成し、5件法で回答を求めた。対象は主に学部1・2年生(約450名)である。

これまでの分析の結果、1) 異文化を理解して受容するスキルは比較的評価が高いが、異文化を批判的な観点から考察する、自文化と異文化を比較検討する、自文化を積極的に説明する等の積極的な態度や発信力については評価が低いことが分かった。今後は、探索的因子分析等を行い、学生の意識の深層にあるものを明らかにしたいと考えている。